第9回 日本文学翻訳コンテスト

2014年2月8日

課題文

180分 (9:00 ~ 12:00)

ちゅういじこう
注意事項

- (1) 文字の上の小さいひらがなは、ルビ (漢字の読み方、フリガナ) です。

စာလုံးအပေါ်တွင်ရေးထားသော ဟီရဂနစာလုံးအသေးသည် ခန့်ဂျိုးစာလုံးအသံထွက်အမှန် (ဖူရီဂန) ဖြစ်ပါသည်။

(ဥပမာ) あした 明日

- (2) 字はきれいに書いてください。審査員が読めないような字を書いた場合は原点の対象になることもあります。

လက်ရေးကို လှပစွာ ရေးသားကြရပါမည်။ အကဲဖြတ်သူများ ဖတ်၍မရအောင် လက်ရေးညံ့ပါက အမှတ်လျော့မည် ကို သတိပြုကြရပါမည်။

- (3) 原作の通り、段落毎に翻訳を書いてください。

မေးခွန်းလွှာတွင်ပါသော စာပိုဒ်အတိုင်း ဘာသာပြန်ကြရန် ဖြစ်ပါသည်။

- (4) 本翻訳コンテストでは、翻訳の正確さだけでなく、原作の味わいを正確に伝えているか、または翻訳された作品の文学的レベルなども審査対象となります。

ဘာသာပြန်ပြိုင်ပွဲသည် မှန်ကန်ရုံသာမက ပြန်ဆိုရန်မဟုတ်ပဲ မူရင်းစာမူရသကို ပေါ်လွင်အောင် ပြန်ဆိုရမည်ဖြစ်ရာ စာပေအဆင့်အတန်း မြင့်မားမှုကိုပါ အကဲဖြတ်အမှတ်ပေးမည်ဖြစ်ကြောင်း သတိပြုကြရပါမည်။

- (4) 三文以上訳していない場合は、審査の対象にはなりませんのでご注意ください。

ဝါကျ ၃ကြောင်းအထက် မပြန်ဆိုနိုင်လျှင် အကဲဖြတ်အမှတ်ပေးမည် မဟုတ်ကြောင်း သတိပြုကြရပါမည်။

小説「金閣寺」

次の文章はみ^み三^{しま}島^{ゆきおちよ}由^き起^{おちよ}夫^{きんかくじ}著「金閣寺」の冒頭の文章です。ミャンマー語に翻訳しなさい。

幼時から父は、私によく、金閣のことを話った。

私の生まれたのは、舞鶴^{まいづる}から東北の、日本海へ突き出たうらさびしい岬^{みさき}である。父の故郷はそこではなく、舞鶴東郊^{まいづるとうこう}の志楽^{しらく}である。懇望されて、僧籍に入り、辺鄙^{へんび}な岬の寺の住職になり、その地で妻をもらって、私という子を設けた。

成生岬^{なりう}の寺の近くには、適当な中学校がなかった。やがて私は父母の膝下を離れ、父の故郷の叔父の家に預けられ、そこから東舞鶴^{ひがしまいづる}中学校へ徒歩で通った。

父の故郷は、光りのおびただしい土地であった。しかし一年のうち、十一月十二月のころには、たとえ雲一つないように見える快晴の日にも、一日に四五へんも時雨^{しぐれ}が渡った。私の変りやすい心情は、この土地で養われたものではないかと思われる。

五月の夕方など、学校からかえって、叔父の家の二階の勉強部屋から、むこうの小山を見る。若葉の山腹が西日を受けて、野の只中に、金屏風^{きんびょうぶ}を建てたように見える。それを見ると私は、金閣を想像した。

写真や教科書で、現実の金閣をたびたび見ながら、私の心の中では、父の話った金閣の幻のほうが勝を制した。

父は決して現実の金閣が、金色にかがやいているなどと話らなかった筈だが、父によれば、金閣ほど美しいものは地上になく、又金閣というその字面、その音韻から、私の心が描きだした金閣は、途方もないものであった。

遠い田の面が日にきらめいているのを見たりすれば、それを見えざる金閣の投影だと思った。福井県^{ふくいけん}とこちら京都府^{きょうとふ}の国堺^{くにざかい}をなす吉坂岬^{きちざかとうげ}は、丁度真東に当たっている。

その峠のあたりから日が昇る。現実の京都とは反対の方角であるのに、私は山あいの朝陽の中から、金閣が朝空へ^{そび}聳えているのを見た。

こういう風に、金閣はいたるところに現われ、しかもそれが現実に見えない点では、この土地における海とよく似ていた。^{まいづるわん しらくむら}舞鶴湾は志楽村の西方一里半に位置していたが、海は山に^{さえ}遮ぎられて見えなかった。しかしこの土地には、いつも海の予感のようなものが漂っていた。風にも^{ときおりうみ}時折海の匂いが^か嗅がれ、海が^{しけ}時化ると、^{かもめ}沢山の鷗がのがれてきて、そこらの田に下りた。

体も弱く、駈足をしても鉄棒をやっても人に負ける上に、生来の^{ども}吃りが、ますます私を引込思案にした。そしてみんなが、私をお寺の子だと知っていた。悪童たちは、吃りの坊主が吃りながらお経を読む真似をしてからかった。講談の中に、吃りの岡っ引の出てくるのがあって、そういうところをわざと声をだして、私に読んで聞かせたりした。

吃りは、いうまでもなく、私と外界とのあいだに一つの^{しょうがい}障碍を置いた。最初の^{おん}音がうまく出ない。その最初の音が、私の内界と外界との間の扉の鍵のようなものであるのに、鍵がうまくあいたためしがない。一般の人は。自由に言葉をあやつることによって、内界と外界との間の戸をあけっぱなしにして、風とおしをよくしておくことができるのに、私にはそれがどうしもできない。鍵が^さ錆びついてしまっているのである。

吃りが、最初の音を発するために^{あせ}焦りにあせっているあいだ、彼は内界の濃密な^{もち}麴から身を引き離そうとじたばたしている小鳥にも似ている。やっと身を引き離したときには、もう遅い。なるほど外界の現実には、私がじたばたしているあいだ、手を休めて待っていてくれるように思われる場合もある。しかし待っていてくれる現実はまだ新鮮な現実ではない。私が手間をかけてやっと外界に達してみても、いつもそこには、瞬間に変色し、ずれてしまった、…… そうしてそれだけ私にふさわしく思われる、鮮度の落ちた現実、半ば^{ふしゅう}腐臭を放つ現実が、横たわっているばかりであった。

こういう少年は、たやすく想像されるように、二種類の相反した権力意志を抱くようになる。私は歴史における暴君の記述が好きであった。吃^{ども}りで、無口な暴君で私があれば、家来どもは私の顔色をうかがって、ひねもすおびえて暮らすことになるであろう。私は明確な、^{すべ}迂りのよい言葉で、私の残^{ざんぎやく}虐を正当化する必要なんかないのだ。私の無言だけが、あらゆる残虐を正当化するのだ。こうして日頃私をさげすむ教師や学友を、片っぱしから処刑する空想をたのしむ一方、私はまた内面世界の王者、静かな諦観にみちた大芸術家になる空想をもたのしんだ。外見こそ負しかったが、私の内面は誰よりも、こうして富んだ。何か拭いがたい負け目を持った少年が自分はひそかに選ばれた者だ、と考えるのは、当然ではあるまいか。この世のどこかに、まだ私自身の知らない使命が私を待っているような気がしていた。

----- / -----